

秋 春 歌 短

132号

目次 ● 2014年10月

秀歌を読もう

中川佐和子

特集

伊香保短歌大会対談

「現代短歌」岡井隆のあゆみ」岡井隆×小島ゆかり

鑑賞を楽しむ

11 2

連載

短歌の技法 基本のき (3)

伊藤一彦

リレーエッセイ ユーモアと短歌

柳 宣宏

24 22

受講者作品

秀歌鑑賞

明石雅子

誌上添削(入門・実作)

藤本喜久恵・久保田 登

26 28

今月の表紙絵



「家族、家族、その奥の家族」
飯沼知寿子
画家

休日の夜にはどの席も家族で埋まっている。同じ家族はいない。ファミリーストランは、同じようできて違う家族がそれぞれに囲み、不思議な場所だ。

受講者のうた……裏表紙

「案内

「のりものの歌」募集のお知らせ

NHK学園学習の旅のご案内

40 33

●受講者のみなさまへ

32

●あなたの声

34

●国立だより

松尾祥子

37

●受講者の歌集

松尾祥子

38

●NHK短歌

39

●短歌集中スクーリング報告

41

●短歌大会結果報告

42

現代短歌～岡井 隆のあゆみ

対談 岡井 隆×小島ゆかり



初期の作品から

小島 岡井さんは昭和三年のお生まれで、十七歳から歌を作っておられますので、歌歴はほぼ七十年。そのあゆみを五十分でたどるのは難しいですが、楽しく過ごしてまいりたいと思います。

やや遠く鶺鴒のおこなひを見て佇ちぬ水
くぐりゐる時のたのしも

岡井 私は愛知一中という名門県立中学に、秀才でなかったのですが入っちゃったんです。今は旭丘高校となっています。小島さんは、この旭丘高校の後輩なんです。私は先輩だから、今日はあまりいじめられる心配はないと思っていますけれどね。

小島 それは、甘いです（笑）。

岡井 私の若い頃、愛知の東三河から西三河にかけて「アララギ」の会員がたくさんいました。歌会の後、三人ぐらいで話をしながら今の明治村あたりまで夜中に歩くんです。湖があつて、朝になると鶺鴒がいっぱい浮かんでいる。「よし、これを写生してやろう。昨日

も土屋文明さんからほめられたし」と、少年は頑張るわけです。

この歌は、鶺鴒が水に潜っているときに、今度どこへ出てくるのかなと考えながら見てみると楽しいよ、という歌です。連作で何首か作りまして、自分では気に入っていたんです。絵でいうとスケッチですが、写生の根本というものがありません。現実を写生しながら、自分の空想を交えながら、いろいろなデフォルメして面白がる、その中の一首ですね。どうして小島さんがこの歌をお選びになったのか、聞きたくなるのですが。

小島 歌集「O（オー）」に入っている「鶺鴒の習作」というごく初期の七首連作で、ほかに、「鶺鴒の鳥はところをかへて潜かづきしが湖心に向かひ低く去り行く」、「鶺鴒の鳥はしづかなるただ孤ひびつなるしぶきの中に立ちき又沈みき」などがあります、ぞくぞくとするようないい歌なんです。

岡井 そう褒められると……。

小島 次の歌も印象深い歌です。

灰黄かひようの枝をひろぐる林みゆ亡びんとする愛恋ひとつ

『斉唱』中の歌です。岡井さんの処女歌集であり、現代歌壇に岡井隆というすごい人が出てきたということに影響付けた歌集ですが、昭和三十一年、なんと私が生まれた年に刊行されています。

岡井 今、明治神宮の常任理事をやっているので神宮外苑によく行きますが、この時は終戦直後ですから非常に寂しい感じでした。明治神宮のすぐ隣に下宿して慶応大学の医学部に通っていました。下宿の庭の向こうに、外苑の木々があり、灰黄の枝の林を見ていた。そのころに恋愛感情を抱いていた人が亡くなられてしまった。作品は、「自分の心の中にある愛恋というものが今、亡びようとしている」と全然別のことを言っている。それと「灰黄の枝を広げようとする林」と、どういう関係があるのか。

「灰黄の枝」の歌について解説している人が何人かいて、斉藤斎藤さんという若い歌人は、灰黄の枝を広げる感じと、亡びていこうとしている愛恋が重なっているということとして、一種の比喩としてとっている。そういうとり方もあるんだなと思いました。今の人は、リアリズムにはとりませんからね。

小島 上の句である光景というか景色のようなものを詠み、下の句で心境を引き出すというのは歌の典型的な形ではありますよね。

岡井 そうです。

小島 驚くのは音の響きです。みなさんが自分で作ろうと思った時に、「かいこう」という音はあまり選ばないのではないかと思うのです。ここに非常に斬新なものがある。「亡びる愛恋」とよく響きあっていると思います。

前衛短歌のころ

渤海のかなた瀕死の白鳥を呼び出して
おり電話口まで

これも非常に注目された作品ですが、読み解きの難しい、それゆえ面白い作品だと思います。昭和三十六年に出た第二歌集「土地よ、痛みを負え」の中の歌です。

岡井 若い頃、政治的なことに非常に興味がありました、キリスト教と並んでマルクス主義に共感していました。でも、ずぶつと入っていないで、批判的に見ているところが多かったんです。「渤海」というのは、今の東

シナ海の辺りですから、向こう側は中国です。

あの巨大な国が、まだのたうち回っている、やっと中国共産党が覇を唱えた頃かなあ。共産主義の国として、まずソビエト・ロシアがあつて、マルクス主義の人たちはみんな夢の国のように思っていました。僕たちは、まだまだ危ないぞと思っていましたね。

今の中国は日本にしきりにちよっかいをかけていますよね。ちよっと立場が変わってしまった。あの頃はむしろ、こちらから「中国さん、あなたも瀕死の白鳥に近いところからよみがえってこなければいけないのだから、たいへんですね」と、そういう感じでした。渤海越しに電話をかけて「もうちよっと頑張らなさいよ」と声をかけている。

小島 電話口に呼び出してね(笑)。

岡井 中国と日本は、今よりもうんと親近感があつたけれど、どちらかというところ、こちらが心配してあげる立場だったわけです。そんなことを考えなくたって、渤海越しに中国大陸に向かって電話をかけるなんて、あるわけない。それも、毛沢東に向かってではなくて、瀕死の白鳥に向かってですよ。暗喩とか

比喩とか、ちよっと難しい話になってきますね。

小島 やっぱり前衛短歌の姿が表れていると思います。

岡井 そうそう、この辺が前衛短歌ですね。

小島 この歌を調べていた頃に地図で確認したのですが、渤海を囲んでいる遼東半島(シヤント)と山東半島の隙間に斜め線を引いてみると、その線上に突き刺さるような感じで北京があります。この歌の作りの中にそれを読み取ると、すごいなと思います。

「前衛短歌」ですが、塚本邦雄さんがもう一方のリーダーでいらした。しかし、塚本さんの前衛の形というのは非常に計算され尽くした本当に技巧的な、あるフォルムをきちっと理想的に作り上げていく、見事な形なんです。岡井さんの前衛の作品というのは、今もそうなのですから、必ずどこかにちよっとした歪みとか破れ目みたいなものがあるって、そこに人間的な顔がちらつとのぞいてくるんです。この歌で言うと「白鳥」とか「電話口」とか、ほんのりと色っぽい感じを出してくる、そういうところがとても好きなのです。

岡井 瀕死の白鳥が、電話口の向こう側にいる恋人みたいな感じですかね。

小島 次は、ドクターの立場での歌です。

肺尖にひとつ昼顔の花燃ゆと告げんと
しつたわむ言葉は

「朝狩」(昭39年刊)という第三歌集ですね。この歌を含む連作群が「Dr. R 日録抄」という中に入っています。「R」というのは岡井隆の隆、「りゅう」です。こういう表現は、当時はものすごく新しく、ものすごくキザだったんじゃないかなと私などは思います。今なら、「Dr. O」など若い人はいくらでもやりますけれど。

岡井 キザなところなどはやっぱり塚本さんの影響が大きかったかなあ。これはアルベール・カミュの「ペスト」という小説に出てくるお医者と同じ視されています。塚本さんは、手紙はみんな「りゅうよ (Ryuuya)」ですからね。会って話している時もほとんど、「りゅう」でした。九つ年上の人ですから、私は「塚本さん」と呼んでました。

当時、私は北里研究所付属病院に勤めてい

ました。肺結核の治療法として、ストレプトマイシン、パス、ヒドラジッドの三者併用がちょうど確立した頃かな。肺尖というのは、肺のいちばん上のところで、比較的空洞ができやすいところです。結核菌がどんどん入っていつて、中を食い破って洞穴を作っています。これを放っておくと次々に転移します。

患者に「肺尖に空洞がひとつありますよ」と言わないで「昼顔の花が燃え上がっていますよ」と、そういう比喻を使う。ちょうど今頃咲いていますが、あの花の淡い感じがレントゲン写真で見ると上葉のいちばん上のところにあるんです。

このころは歌を作るのに、前衛短歌で覚えたい比喩的な表現をしていましたから、「肺にひとつ空洞がありますよと告げんとしてつづい淀んだ」と言えはいいものを、「昼顔」という言葉を使う。その頃の結核は死病ですから、「空洞があるよ」とは言いにくい。「たむ」もある意味で比喩です。

大切にしたい韻律

岡井 五七五七七の定型も大事ですけど、それと同時に、そこで使われる言葉の響き合

い、韻律、音楽性が大事です。ただし、この言葉を使ったほうが音楽的に響くだろうなんて理屈をこねた上で選んでいるわけではなくて、平生からの訓練で瞬間にそういう言葉が出てくる。それがいちばん大事だと思っています。

小島 たしか歌集「朝狩」だったと思いますけれど、あとがきに「短歌はやっぱり調べなんだ」と書いておられましたね。

岡井 塚本さんと寺山修司さんと私とで、前衛の三人男だったけれど、みんな韻律のことは放つたらかして、何でも面白いことを言えればいいんだという感じでした。前衛の最盛期は二年か三年だったと思いますが、この時は調べを否定したんだね。むしろ、意味内容のほうが大事で、音楽性のほうは外へおいたのです。ところが、これを数年間やったら「ああ、やっぱり歌っているのは調べなんだ」ということに気がついた。

小島 お医者さんに写真を見せられて、「結核」と言われるより、「あなた、ここに昼顔が……」、「昼顔病ですよ」なんて言われたほうが、心は落ち着くかもしれない（笑）。

次の歌は、読むのがちょっと恥ずかしいの

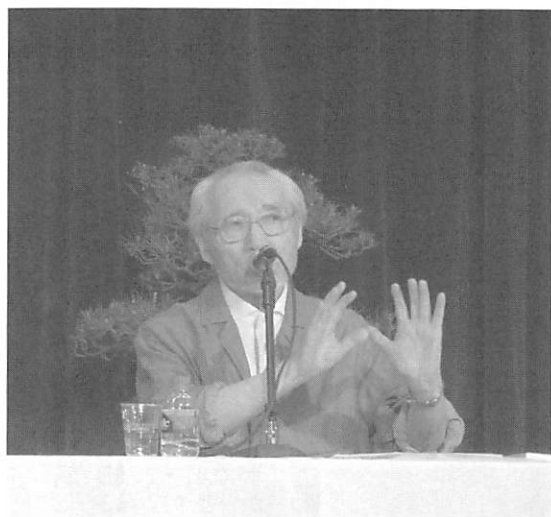
ですけど。歌集「眠底紀行」（昭42年刊）にあります。

掌てのなかへ降ふる精液の迅はやきかなアレキサンドリア種の曙あけぼのに

岡井 「アレキサンドリア種の曙」というのは、同じくらしいの年配の有名な詩人（安西均）の、アレキサンドリア種と朝明けの色を結びつけた詩、それを短歌に持ってきたわけです。

小島 アレキサンドリア・オブ・マスカット、マスカットですね。

岡井 そう。今はブドウも各種あって、いろいろな色がありますが、この頃はアレキサンドリアと言っただけでわかりました。戦後間もない頃で、戦争中には禁じられていた表現が解放されて、小説の世界などはボルノグラフィに近いようなものが、もう嫌になるほどあった。これはオナニズムの歌なんですけれど、オナニーなどという性行為も、よほど上手に作らないと品が悪くなる。「アレキサンドリア種の曙」などとくつつけて、美化するわけですよ。



小島 すばらしくうまくいっていますよね。

岡井 飲食や排泄行為といったものも詠っていくべきだという考えに賛成ですが、実際やってみると本当に難しいですよ。

小島 精液を詠いながら、こんなに格調高い歌は、めったにないと思います。

飛ぶ雪の確氷をすぎて昏みゆくいま
紛れなき男のころ

『天河庭園集』、これも全作品集に収められ、

後に単行本になった歌集ですね。この頃の歌には、「いま紛れなき男のころ」なんていうさかんに歌謡に接近していくようなフレーズがあります。同じ連作の中の「泥ふたたび水のおもてに和なぐるころを迷うなよわが特急あずさ」も「迷うなよわが特急あずさ」がインプットされてしまっています。私は今日、「あさま」に乗ってききましたが、「迷うなよわが特急あさま」だったらさわやかすぎますし、「やまびこ」では、ちょっと長閑すぎる。「迷うなよわが特急あずさ」という濁音を含むこの音が、実に屈折した心境をよく表しています。「飛ぶ雪の確氷」。まるで「確氷」の枕詞のように「飛ぶ雪」がかかってくる。これはやはり連作で読んでこそ、ドキドキ、ぞくぞくしてくるのですが、この時は意識されていたのですか？

岡井 こういうことを考えて作ったとか、「ここで作風を変えたね」とか言われたって、作っているときはそんなつもりはまったくなくて、必死の思いでやっているわけです。この歌は、確氷峠をバスで下っていく時の気持ちです。確氷峠を歩いているようにも、あるいはスキーで滑っているようにも、いくらで

もとれますが、確氷峠を通り過ぎながら自分の心、男だけが持つ心が紛れなくありありと見えてきたという歌です。どうとでもとれるけれど、「飛ぶ雪の確氷をすぎて昏みゆく」、このリズム感というのかなあ……。

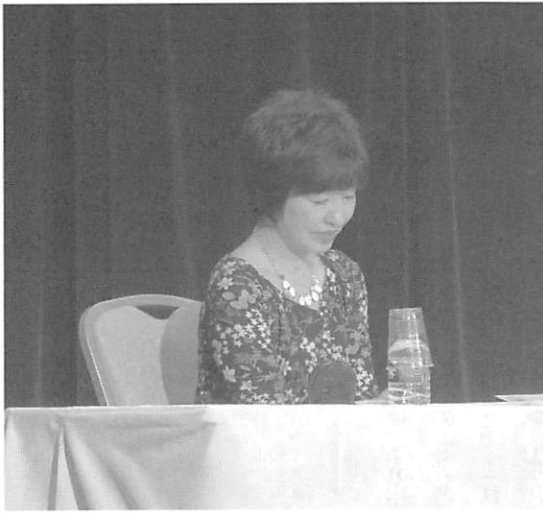
よく客観句と主観句を合わせると言いますね。上の句は客観句で下の句は主観句という歌はたくさんあります。さっきの「灰黄の枝」もそうです。歌作りの基本的なパターンで、いろいろと練習しますから、それが出たんですかね。でも、苦しかったです、あの頃は。本当に（笑）。

歌の休止から復帰へ

小島 昭和四十五年七月にいろいろなご事情で九州へ行かれます。漂泊、放浪……。逃亡かどうかはわからないけれど（笑）。昭和五十年まで歌を「休止」と年譜にありますが、この間にも茂吉のことなど様々な出版物を出されていますから、活動自体をおやめになつたわけではありませんね。そして、『鶯卵亭』（昭50年刊）、『歳月の贈物』（昭53年刊）、この歌集で本格的に歌に復帰なさいました。

歳月はさぶしき乳を頒^{ちわか}ても復^{また}た春は
来ぬ花をかか^かけて

『歳月の贈物』は個人的にとっても思い出深い歌集なんです。昭和五十四年に大学を卒業して郷里に帰り、TBS系列の中部日本放送で秘書部に勤めていました。その頃、岡井さんが地元の有識者、文化人ということで、番組審査委員のお一人だった。月に一度、番組審査委員会があつて、そこで私はお茶出しをしていました。もう憧れの岡井さんですか



ら、岡井さんばかり見ているわけですよ。あ
る時、おしほりで顔をお拭きになったので
「あらっ」と思つて、すぐさま新しいおしほ
りをお出ししました。覚えていらつしやらな
いと思いますけれど（笑）。

岡井 覚えていますよ。かわいらしい、お美
しい方でした。

小島 えっ！

岡井 本当に偶然ですね。

小島 「おしほりを汚してしまつてすみませ
ん」とおっしゃつて、新しいものを手にされ
て、「汚れているのは顔だけじゃないんです
けどね」と、ニコツとお笑いになった。

岡井 そんなばかなことを言いました？

小島 心の中では、なんてキザなんだろうと
思いながらも、笑顔が本当にすてきで……。

私も純情でしたので、サインを欲しいのです
が恐れ多くてとても言えない。社長室にいら
した当時南山大学の先生だった詩人の方に頼
んで、岡井さんのサインをいただきました。
それが『歳月の贈物』です。黒のとつくり
セーターがはやっている頃で、岡井さんもお
召しになっていましたね。

岡井 僕の友人で、今西さんという人がいま

して、この歌を胸のところに書いたTシャツ
を作つて、みんなに配つたんですが、少し年
上の友人からは「乳なんて書いてあるから恥
ずかしくて着られませぬよ」と言われまし
た。でもこれは乳房から受け取る乳汁、つま
り母乳の話なんです。その人に、「すぐに別
のことを考えちゃうんだろうけれど、私が
言っているのは母乳の話だよ」といいまし
た。

五年経つた、十年経つたということが、あ
んなに苦しかったが、我々に乳をくわえさせ
て養ってくれるみたいに、「歳月」というも
のが癒してくれるんだということをつくづく
思うわけです。何年か、歌をやめていた時代
を経ますと、本当に「ああ、三年経つたんだ
な」と。その頃、実を言えば行く先は真つ暗
です。その頃まだお袋が生きていて、「隆さ
ん、これからどう生きていくつもりだね？」
などと言われてね。そういう心境とこの歌は
合わされているんで、そんなに楽しい歌でも
ないのです。

“核”をどう歌つてきたか

小島 では、平成に入ります。「どうい

なんだろう、これは？」という、歌集『宮殿』（平3年刊）の歌です。

ヘイ 龍 ドラゴン カム・ヒアといふ声があるま
つ暗だぜつていふ声があふ

岡井 「ヘイ」とか「カム・ヒア」とか、一種の俗語ですよ。ドラゴンは龍で、僕の「隆」という字が「りゅう」で、先ほども申しましたがカミュの『ペスト』の中の医者と重なっているわけです。僕の感じだと、これはちよつと高いところから下の洞穴を見ている。下の洞穴から「ヘイ龍カム・ヒア」と誰かが言うんだね。それで「そうか、あそこに下りて行かなきゃいけないな」「下りて行くんだよ、俺は」と。

小島 地下組織に行くようですね。

岡井 「ヘイ龍」と呼びかけて、「下りて来いよ」と言った男の横にもう一人いて、「ここはまつ暗だぜ」と注釈する。「そんなこと、わかっているよ」と。絶望のあまり、こういうところを下りて行く。でも、それを妙にくそ真面目に作らないで、「ヘイ龍カム・ヒア」とか「まつ暗だぜ」と俗語を交えて作りた

かった。

小島 なんだか、ジャッキー・チェンが出てきてもよさそうな歌です。「歳月はさぶしき……」などと同じ人が、こういう歌を作っているところ、なんとも言えないすごさがあるなと思います。

白鳥のねむれる沼を抱きながら夜もすがら濃くなりゆくウラン

歌集『ウランと白鳥』（平10年刊）です。

今、再び注目すべき歌かといえます。巻頭に三十首ぐらいの大連作があつて、一九九六年、平成八年とありますが、青森県六ヶ所村の原子燃料のサイクル施設を見学に行かれていた。それに先立つ二十年くらい前ですか、東京電力の核燃料シンポジウムで委員をされていて、とても早い段階から意識を持って参加されているんですね。この歌は、六ヶ所村の濃縮工場の歌だろうと思います。寺山修司の故郷、三沢も近いです。調べたら、鷹架沼、尾駁沼、小川原湖など、白鳥の飛来地もあるんですね。

岡井 私は理系だったものですから、物理

学、化学、数学、できもしないのに講義だけは受けていました。それで、ずい分昔から原子核論の歌を作っていました、長い間の関心ということになります。それで3・11の後に、原発を擁護する歌を作りました。

小島 「原発が犠牲者かもしれない」という歌ですね。

岡井 文章にも書いて、果たせるかな、たくさんの人からぶん殴られるわけだけれど、殴ってくる人たちに「あなた、原子核論って知ってる？ 積分記号が三つくらい並んで難しい」と言いたい。原子核エネルギーの開発は実に長い間、世界中で優秀な学者たちがいろいろやってきた結果なのです。

偉そうなことを言うつもりはまったくないけれど、僕の悪口を言うなら、一度、六ヶ所村に行つて、見て来てほしいですね。原子核エネルギーはわからなくてもいいから、そのために歴代の人たちが苦心に苦心を重ねて、最終的に原子核エネルギーを開発したわけでも知つていて、僕の悪口を言うならいいのですけどね。

実際に行くと、いろいろなことがわかりま

す。たしかに、地下に処理済のものを置くわけですから、「危ないなあ、こんな所に置いてどうするんだろう」と思います。防護服を着て入って行って、窓から覗くと、缶のような入れ物がずらっと並んでいて、「あれにみんなウラニウムが入っているんですよ」と。しかも現場では若い女の子や男の子たちが働いているんです。そういう人たちが働いているところも見た上で、僕が、全然違う立場からだけれど、原発を擁護したことを非難するならわかりますよ。

ちよと湖に白鳥が来ていてね。その向こう側にウランの処理施設がある。なかなか日本的な牧歌的な村だし、あれはあれで一つの光景かなと思うんだね。いろいろな人が悪口を言ったけれど、こちらがびくともしないのは、何十年来ずっと見てきているし、積分記号が三つ入ったような難しいやつでも、一応講義を受けたんだぜ、と思えるからね。

小島 受けたんだぜ、ですね(笑)。

岡井 そう。

小島 ぜひ「ウランと白鳥」をみなさん、読んでほしいですね。この歌集は構成という点でも私は瞠目しました。巻頭に、初めてアメ

リカのシカゴでウラン濃縮が行われたという歌があつて、そして、今おっしゃったような厳しい歌が並ぶ。ところが巻末に「白鳥の午後」という連作があつて、白鳥の自然な姿を、実に柔らかく豊かに、描写だけではなく詠っている。最後の一首に、白鳥が午後の光に汚れながら飛ぶけれど、飛んでいる白は飛ばない白鳥より美しいという歌があつて、やつぱりすごいんです。

歌を作る上で大事なこと

それでは、次は非常に新しい作です。

老残をよそほひ手すりにすがり行く本
当は軽く上れるんだが

「X イクス」(平22年刊)という歌集です。

「述懐スル私」という副題があります。この歌を読んでふと思つたんですけれど、岡井さんはいつまでも作品は若々しいし、どんどん挑戦もするから、若い人が岡井さんを労われないのですね。それで労わりたいからこういう歌を作るのかなと思つたのですが(笑)。この歌について、何かご自身でおっしゃるこ

とがありますでしょうか。

岡井 嫌な年寄りだねえ。こういうことを言うから嫌われるんだよね。でも正直言つて、駅の階段などなるべく歩くようにしていますけれど、全部手すりに掴まっています。一度転んで顔を打つたものだから。

小島 歯も折れちゃいましたね。

岡井 そうなんです。歩いていて、バタン、と倒れたんですが、その瞬間、おそらく一、二秒は意識がなくなる。いろいろな人に聞いてみると、そういう人が多いですね。頭を打つていれば大変だったんだろうけれど……。手すりには絶対に掴まらなくてはいいないと思つています。

小島 最後は岡井さんらしい、色つぼく、そして斎藤茂吉の流れを根底に感じさせる歌にしたいと思います。

薔薇抱いて湯に沈むときあふれたるか
なしき音を人知るなゆめ

昭和五十年に出た歌集「鶯卵亭」の歌です。この「人知るなゆめ」のあたりに、茂吉を思い出される方も多いと思います。茂吉に

は（草づたふ朝の蛍よみじかかるわれのいのちを死なしむなゆめ」という歌があります。無意識か意識的かわかりませんが、すつとここに入ってくるんですね。上の句の「薔薇抱いて湯に沈む」、これは絶対に女性だと思うのですが、違う鑑賞をしている人もいます。

岡井 薔薇じゃないですかね？

小島 違うと思います。

岡井 要するに「薔薇」も隠喩なんですけれど、先ほどの「白鳥」も同じで直接言わない。そして「人知るなゆめ」と。これは「ゆめゆめ知ることなかれ」の「ゆめ」で、名詞の「夢」ではない、一種の助詞的な働きをしています。

小島 禁止を促すというか、「くしてはだめ」と、そういう感じですね。

岡井 「かなしき」も「悲」という字ではない。そういう「かなしき」を出しておいて「知るなゆめ」と。古いけれど、ある一つの韻律を持った、音楽性を持ったものを上の句と合わせる、ということかなあ。

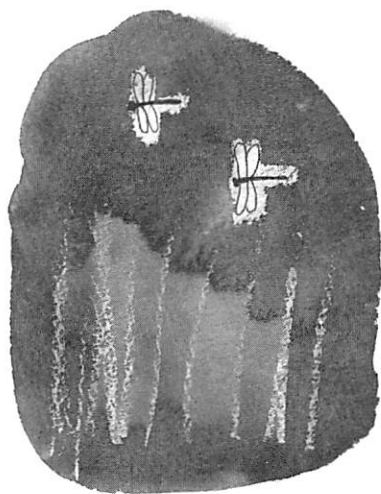
小島 そうですね。女性とお風呂に入っていると、お湯が溢れますよね。その音が嬉

しいんじゃないかと、愛しいでもあり、哀傷の「哀」でもあり、それを「人知るなゆめ」と。異性に限りませんが、人を愛すれば逆に孤独感が深まるという、根本的な詩歌のテーマですね。その孤独感をこういう形で照らし出しているのはすばらしいと思うし、もともと岡井さんらしさのある歌だと思いました。

岡井 歌を作っている時というのは夢中になっていきますから、人が解説してくださるような、そういうもってもらいたい感じで作っているわけでもなんでもない。本能的に短歌の形式を大事にして、五七五七七と日本語をどうやって合わせるかということになります。

日本語にはいろいろな言葉があるけれど、その中で美しい響きを持った言葉、人の作品を読んでそういったものを学んで、そして自分で作る。そして次は、意味内容よりは韻律やリズムを大事にするという訓練でしょうかね。それは理屈でもなんでもありません、しかし短歌を作る上ではいちばん大事なことだと思います。

小島 長い時間、ありがとうございました。



岡井隆をもつと知るには――

現代詩文庫502 岡井隆歌集

思潮社刊（定価二二〇〇円十税）

歌集 ネフスキイ

書肆山田刊（定価三五〇〇円十税）

静かな生活 短歌日記2010

ふらんす堂刊（定価二〇〇〇円十税）